

ガブリエル・タルドの社会学と その現代的意義について ——社会科学の専門性と政治をめぐる考察——

村澤真保呂*

Gabriel Tarde's possible impact on postmodern sociology

Mahoro MURASAWA*

Gabriel Tarde (1843–1904) is considered as the tough opponent of Emile Durkheim, the founder of modern French sociology. In spite of the well-known debates between the two, Tarde's works were soon forgotten in the history of sociology. However, at the beginning of the 21st century, a century after his death, Tarde's works were "discovered" by post-modernist philosophers, anthropologists, and sociologists. In order to understand "Tardian Renaissance" and reevaluate Tardian sociology, this article considers two debates: one is the debate between Tarde and Durkheim at the beginning of the 20th century, and the other is the debate between a traditional sociologist and a post-modern anthropologist at the beginning of the 21st century. These two debates demonstrate not only the antagonism between nationalist and cosmopolitan sociology, but also the particularity of Tardian thoughts, deeply influenced by Leibniz's monadology, on which postmodern sociology will be possibly founded.

はじめに

1904年、まだ生まれてから日の浅い社会学という学問のあり方をめぐって、二人の学者がパリの社会高等研究所 *École des hautes études sociales* で真正面から対決した。一方は『自殺論』の著者であり学会誌「社会学年報 *L'année sociologique*」の中心人物として一大学派を形成していたエミール・デュルケム (1858–1917) であり、他方は犯罪学者としてロンブローゾ学派の「生来的犯罪者説」と対抗し、社会学者として「模倣説」を唱え、メディアの発達によって生まれた新たな「公衆」について論じたことで知られるガブリエル・タルド (1843–1904) である。それは「タルド=デュルケム論争」あるいは「社会唯名論/社会实在論の対立」として知られる論争の最終局面であった。現在、デュルケムはフランス社会学を確立した立役者として、社会学の教科書でも中心的思想家として扱われるが、タルドのほうは滅多に触れられることがない。せいぜい「デュルケムと論争して敗北した人物」して簡単に記載されているか、「公衆 *le publique*」という概念を提唱した人物として知られるにすぎない。タルドが忘却されていった理由としては、当時まだ学問領域として確立されていなかった「社会学」が社会思想から社会科学へと移行していくにあたり、哲学的色彩の濃いタルドの理論がしだいに社会学とみなされなくなっていったことにくわえ、タルドがデュルケムと違って強力な「学派」を形成しなかったこともあるだろう。

* 龍谷大学 Ryukoku University

ところが近年、フランスを中心に、著名な哲学者であるドゥルーズの弟子たちや政治思想家であるネグリの支持者たちを中心として、さまざまな領域でタルドを再評価する動きが起こっている。また、この一世紀前の社会学者の再評価をめぐって、学説史家のほうからの反論も起こっており、あたかも百年前のタルド=デュルケム論争が再燃したかのような印象さえ受ける。この一世紀のあいだに、いったい何が起こったのだろうか。過去と現在の論争に、いったいどのようなつながりがあるのだろうか？

本論文では、まず現在のタルド再評価の動きとそこで生じた論争について、過去の論争との関連を考察するために、タルドとデュルケムの思想的前提に着目し、とくに冒頭で触れた社会学のあり方にかんする両者の主張の違いがどのようなものであったかを検証する。そこから、過去と現在の論争の背景にある政治的対立を明らかにすることで、タルド=デュルケム論争の現代的意義を再考してみたい。

1. タルドマニア？

すでに旧聞に属するが、21世紀に入ってもなく、「タルドマニア？——タルドの現代的利用にかんする考察」(Mucchielli 2000)と題された論文が、フランスの社会学者・学説史家であるローラン・ミュキエリによって発表された。それは主として、1999年からフランスで刊行されたタルド著作集の関係者たちを攻撃する内容であった。著作集刊行の中心にいたのは、エリック・アリエズ、ジャン=クレ・マルタン、ルネ・シェレールなどのジル・ドゥルーズの弟子たちである哲学者たちのほか、イタリアの政治思想家アントニオ・ネグリの弟子である社会学者マウリツィオ・ラツァラート、科学人類学者・社会学者であるブルーノ・ラトゥールなどである。ミュキエリの批判の内容は、彼らの論文や解説がしばしば使用する「忘れられた社会学者タルド」という表現は事実誤認で、実際には過去にも多くの著者によってタルドは再評価されてきたことを指摘し、彼らの学説史にかんする無知を糾弾するものであった。同時にそこには、過去の社会学者であるタルドを学説史以外の観点から考察することを拒む主張も含まれていた。

「タルドはピナテル主義者でも、ブードン主義者でも、ドゥルーズ主義者でも、フーコー主義者でも、ラトゥール主義者でもなく、さらには現代の誰の思想にも関係がない。タルドは、その当時には重要な著者であったが、学派をなすことなく1904年に死去した人物である。思想の歴史のなかでタルドの思想がどのように生まれ、発展し、受容され、影響を与えたのだろうか？このようなことについて述べるのは、人文科学の歴史家がおこなう仕事である」(Mucchielli 2000: 182)

このようなミュキエリの批判は、すぐに反論を招いた。

「私はミュキエリの歴史主義には与しない。われわれが死んだ思想家を扱うにあたり最善の方法は、その思想家を、まだ生きていて現代のわれわれが考えることを助けてくれる人物であるかのように扱うことである」(Latour 2001 [=2011]: 131)。

とはいえ、60年代からタルドに触れた著作がいくつも公表されていた、というミュキエリの指摘が正しいことも事実である。まず、59年から72年にかけて犯罪学者としてのタルドを再評価する著作が主にピナテルによりいくつも刊行された。また、68年にはドゥルーズが『差異と反復』においてタルドを「最後の偉大な自然哲学者」と評価し、70年にはジャン・ミレによりタルドを歴史哲学者として評価する著作『ガブリエル・タルドと歴史哲学』（Millet 1970）が刊行された。その前後もタルドに触れたいくつかの著作が公表されているが、90年代以降になると、ドゥルーズの影響を受けた著作が目立つようになり、ラッツァラートの『発明の力能——政治経済学に抗するガブリエル・タルドの経済心理学』（Lazzarato 2002）のような研究書やルトンチュリエの「コミュニケーションとネットワークの社会学者、ガブリエル・タルド」（Letonturier 2000）のような論文が公表され、現代の社会問題を扱うための理論家としてタルドを復活させようとする動きが顕著になる。そのころに刊行が開始されたタルド著作集も、同じような意図にもとづいて編集されている。

しかし、少し考えてみると、一世紀も前の社会学者の理論をそのまま現代社会の理解に使用するのは、なにかしら奇妙な感じを受ける。それほど過去の思想家になると、通常は批判や分析の対象となることはあっても、その理論がそのまま分析道具とされることはあまりないだろう。また、すでに国内で評価の高い学説史家が、他領域の人々の再評価の動きを大人げないまでの態度で叩きつぶそうとすることもまた、同じくらい奇妙な光景である。たとえば、ルソーの社会契約説にもとづいて現代社会を分析しようと誰が思うだろうか？ましてや、ポスト近代社会の思想としてそれを復活させようとは誰が思うだろうか？かりに誰かがそのように復活させようとしたとして、学説史家はその解釈の誤りを指摘することはあっても、学説史家による解釈の独占を主張するだろうか？

ともあれ、かつてデュルケムに批判されたタルドについて現在の哲学者（非社会学者）たちが再評価し、それにたいして社会学者・社会学説史家が学問の専門性の問題として激しい攻撃をくわえているわけだが、その様子はまるで遺恨合戦のようであり、両者のそれぞれが過去の二人の学者に自分たちの立場や主張を投影し、争っているかのように映る。いったいそこでは何が起きているのだろうか？このことを考えるために、まず時代をさかのぼって、デュルケムおよびタルドが実際にどのような思想を展開し、どうして対立したのかを検討することにしよう。

2. タルドとデュルケム——論争とその背景

1) 対照的な二人

デュルケムとタルドの対立は、しばしば両者の気質や生育環境の違いから説明される。というのも、それほどまでに両者の性格もキャリアも対照的だからである。シャルル・ブロンデルによれば、両者はこう描写される。

「タルドの経歴には予想外の事件がたくさんみられる…（略）…高等理工科学校の入試を準備しておきながら、地方裁判官を経て、コレージュ・ド・フランス学院の教授として生涯を終えたタルドのような人物は、あまりいないだろう。…これにたいしてデュルケムの経歴はほど、一様で、規則的で、平凡な経歴はない。というのは、彼は大学教授になることをこころざし、大学教授になり、一生大学教授でありつづけたからである」（Blondel 1928 [= 1958]: 42-43）¹⁾

一方のデュルケムは、代々ラビの職にある厳格な気風の家に生まれ、ドイツに留学して新カント派の洗礼を受け、規範主義的で理性中心主義的な思想的傾向のもと、第三共和政における世俗化（カトリックの影響を廃した新たな市民秩序の構築）と社会的連帯の樹立という当時の課題にたいして、それを道徳と教育の問題として取り組み、科学的な観点から解決するために、専門科学としての社会学を樹立することを目指し、一大学派を結成した。

他方タルドは、地方の没落した貴族の家に生まれ、南仏のカトリック色の濃い環境で若いころから神秘主義的傾向をもって育ち、詩作にふけり、芸術を愛好しつつ、理系の大学に進むことを目指しながらも病気のため断念し、職を得るために地方判事となり、そのかたわらで犯罪学の書物を書いているうちにパリの司法統計局長に任命され、イタリアのロンブローゾ学派の生来的犯罪者説と対決したフランス環境学派の犯罪学者として名声を得た。その後、その名声をあっさり捨てて社会学者になり、次いでパリ社会学会の初代会長となり、最後にはコレージュ・ド・フランスの現代哲学講座の教授に就任し、自身の構想した社会学を教えるのみならず、経済学にかんする大著を残して人生を終え、終生弟子を育てることはなかった。

両者のパーソナリティの対比は、稲葉三千男（1964）による「カルテジアンとパスカリアン」という対比に示されるとおりなのだが、大野道邦（1986）が指摘するように、それは第三共和政の思想的な二大潮流とも無縁ではなかった。T. N. クラークによれば、一方の「カルテジアン」はブルジョワの利益と結びつき、国立大学や官僚組織、裕福な都市住民を中心に広まった、カトリックの影響から逃れ、理性と科学、権威を求める思潮であった。他方の「精細の精神」——あるいは「パスカリアン」——は、貴族の末裔や農民、都市プロレタリアを中心に広まった、理性や科学、権威よりも芸術や創造性を重視する反体制的な思潮であった。そして19世紀末になると、前者はアカデミックな伝統を重視するソルボンヌ、後者は一般市民向けの啓蒙組織であるコレージュ・ド・フランスが体现することになる（Clark 1969）²⁾。そしてタルドは後者の、デュルケムは前者の教授となった。もちろん彼らの教授就任は偶然に左右されており、必然的な出来事とは言えない。しかし後で触れるように、この二人が（クラークの言葉を信じるならば）それぞれの組織の特徴をそのまま体现する思想傾向をそなえていたこともまた、たしかなことである。

2) 『自殺論』にみるデュルケムの思想

デュルケムによるタルド批判が大々的に展開されるのは、彼の主著『自殺論』（1897）からである。そこでのデュルケムの批判については、すでにベナールの研究（1995）をはじめ、いくつかの詳細な研究がある。ちなみにベナールは二人の論争の背景について、デュルケムの側のタルドにたいする強烈な羨望、「社会学年報」発刊にあたって若手学者の人心掌握の必要性といったことも指摘しているが、こうしたことは本論の趣旨からはずれるので、ここではその詳細に立ち入らない。それでもデュルケムが『自殺論』執筆にあたって甥のマルセル・モースを、当時は司法統計局長であったタルドのもとへ派遣し、機密資料を提供する便宜を図ってもらったうえで、『自殺論』で大がかりなタルド批判を展開したことが、両者のあいだに感情的な問題をもたらしたことは、一般によく知られている事実であろう。

このように二人のキャリアやパーソナリティに着目して両者の対立劇を読み解くことも可能かもしれないし、そうした研究にも学ぶところが多いのもたしかである（夏刈 2008）。しかし、本論

では二人の思想内容に着目して両者の対立を読み解くことのほうが重要であるので、ここから両者の思想の違いを検討していくことにしよう。本来であればタルドの思想を先に紹介するべきであるが、本論文の構成上の都合から、ここではまず『自殺論』の内容を手短に整理し、デュルケムの思想的特徴と彼のタルドにたいする批判の要点をまとめることから始めたい。

①『自殺論』の概略とデュルケム社会学の特徴

社会学を志す者にとって現在もお必読文献であるこの著作は、『社会学的方法の基準』（Durkheim 1895）で述べられた「社会学的事実の決定要因は、個人の意識ではなく先行する社会的事実に求められなければならない」という基準の応用であり、デュルケムの出世作であると同時に代表作でもある。当時のヨーロッパでは自殺率の急増が社会問題となっていたが、この著作は自殺率と社会類型のあいだにいかなる関係があるかを明らかにすることを目的としている。デュルケムは、自殺の種類を、それぞれ集団本位的自殺、自己本位的自殺、アノミー的自殺、宿命的自殺に分けて、その前提となる社会関係の特徴を説明する。

このようなデュルケムの分類は、社会規範を中心概念として社会現象を理解しようとするデュルケム社会学の特徴をよく示している。デュルケムによれば、社会的事実の特徴は「個人の外側でありながら、内側から拘束する」ことに特徴があり、主にそれは道徳や社会規範などの個人を超越した「集合表象」と同一視される。さらにデュルケムは、後に神と社会を同一物とまで述べるまでに至る（Durkheim 1912）。ここで指摘しておきたいのは、デュルケムが、社会は個人に超越すると考え、神と同一視するほどに社会規範に高い価値を与えていたことである。デュルケムが、社会現象を個人心理にもとづいて理解する立場を厳しく否定するのも、このような彼の観点に由来する。そしてデュルケムのタルドへの攻撃を理解するには、この点をまず押さえておかなければならない³⁾。

②『自殺論』におけるタルド批判

『自殺論』のもうひとつの目的は、当時一斉を風靡していたタルドの主著『模倣の法則』（Tarde 1890）で展開された「模倣説」を徹底的に批判することである。模倣説については次に紹介するが、ここではさしあたり、社会現象を人間の模倣性によって理解しようとする主張として理解しておこう。デュルケムは、かりにタルドの模倣説にもとづくなら、自殺は心理学的現象である「模倣」によって広がることになると主張したうえで、「自殺を猿まねするような人間が普遍的であるはずがない」と模倣説を切り捨て、みずからの規範主義的な観点を導入するために、次のように述べる。

「世論を尊重し、あるいは恐れて行動することは、模倣によって行動することではない」(Durkheim 1897 [=1985]: 132)

そしてデュルケムは、個人心理的なレベルで作用する模倣は、集合的レベルで作用する集合表象の影響にくらべたら微々たるものであり、議論するのにもばかばかしいと結論する。

「したがって、人々が模倣に認めている力は虚構にはかならない…（略）…集合的状态は、ほとんど全員一致の、また一般に長年にわたる同意の対象であるだけに、大きな抵抗の力をもつ

ており、これへの個人的な改革をやりぬくのは容易ではない。一個人以上の何者でもない一個人が、いかにして社会を思うがままに仕立て上げるだけの力をもつことができよう?」。(Durkheim 1897 [=1985]: 156)

しかし、先に挙げたベナールをはじめとする多くの論者が指摘するように、実のところ、このようなデュルケムによる批判はタルドの「模倣説」の内容を意図的に曲解しており、有効性を欠いている。それでは、実際にはタルドの模倣説はどのようなものであったのだろうか。ここで模倣説の内容に触れるにあたり、タルドが模倣説を展開した背景についても触れることで、当時の社会科学(社会学)への影響もあわせて紹介してみたい。

3) 「模倣説」の背景——犯罪学から社会学へ

タルドが活躍した時代である19世紀後半、生まれたばかりの第三共和政府がパリ・コミューンを残虐な方法で鎮圧し、普仏戦争後の混乱した社会情勢によりややく安定の兆しがみえたと思われた矢先、パリ市民たちはコミューンに参加した無政府主義者とは別の、厄介な人々に悩まされていた。すなわち「犯罪常習者」である。ルヌヴィル(Reneville 2004)によれば、1872年、司法統計局が投獄者の再犯率が85%に達していることを報告して以来、監獄制度を組織化することと若者の犯罪を防ぐことが政府にとって最重要課題とみなされるようになる。政府と議会は収監にかんする法制度改革を矢継ぎ早に打ち出し、ついに1877年には議会主導で監獄総協会 *Société Générale des Prisons* が設立された。これは収監と処罰にかんする提言をおこなう専門機関として、フランス政府の「犯罪との戦い」の最前線で活動することになる。

このような状況のなかで、「犯罪との戦い」に勝利を収めるためには「犯罪者」を科学的に理解する必要がある、という認識が学者たちのあいだに広まっていく。かつて一世を風靡したドイツ人医師フランツ・ガル(1758-1828)の「骨相学」は、すでにその影響力を失いつつあったとはいえ、それでも人類学的観点から犯罪者を研究する可能性に道を開いた。また精神医学や心理学の領域でも「精神異常 *aliénation mentale*」をめぐる盛んに議論され、犯罪と精神異常との関連に注目が集まっていた。こうした新たな理論的パラダイムの登場は、法学にも大きな影響を与えた。古典派の観点に立てば、ある人物の犯罪が処罰されるのは、その人物が自由意志にもとづいて法を破ったからであり、その人物が自分の行為を十分に自覚している以上、彼はその行為の責任を負わなければならない。しかし、新たな理論的パラダイムは、そのような責任能力のある主体観とは異なる主体観を提起していた。すなわち、「犯罪は、犯罪者本人の自由意志によるのではなく、人類学的あるいは精神医学的に決定された行為ではないだろうか?」という問題を提起したのである。こうして「犯罪人類学」という新たな分野が脚光を浴びるようになり、1885年から1911年までに国際学会が次々と設立された。この動きの中心になったのが、現在では「犯罪学の父」とも呼ばれる、イタリアのチェザーレ・ロンブローゾ(1835-1909)とその一派であり、アレクサンドル・ラカサーニュ(1843-1924)やガブリエル・タルドたちの「フランス環境学派」である。ロンブローゾらが遺伝学にもとづいて「生来的犯罪者説」を主張し、「犯罪者は遺伝によって決まる」という優生学的思想の色濃い犯罪学を提唱したのに対して、ラカサーニュとタルドはともに犯罪人類学の学会設立に尽力しつつ、「犯罪は社会環境に由来する」と主張し、ロンブローゾ学派と真っ向からぶつ

かり、論争を繰り広げたのである。

ペリゴール地方のサルラという田舎町の判事であったタルドは、その論争での活躍により各界の賞賛を浴びる。犯罪学者タルドの誕生である。それ以降タルドは、司法省統計局長就任（1894）、社会学会会長就任（1895）、コレージュ・ド・フランス現代哲学講座教授就任（1900）と、名声の階段を急ぎ足で駆け上っていく。そして当初は犯罪学者として知られていたのが、『模倣の法則』（Tarde 1890）をはじめとして立て続けに社会学の著作を公表すると、社会学者として高い評価を受けるようになり、フランス社会学の中心人物のひとりになっていく。そして社会学者としての名声が確固たるものになったと思われる矢先、エミール・デュルケムからの厳しい攻撃を受け、論争の途中で亡くなると、タルドの著作と思想は、人々の記憶から急速に忘れ去られ、社会学史においても「デュルケムに論争で敗北した人物」として顧みられなくなっていく。

やや説明が脱線したが、タルドの模倣説が登場した背景として、「フランス環境学派」たちが展開した主張を無視することはできない。つまり、犯罪が社会環境にその原因をもつとすれば、それはいったいどのように広がるのだろうか、という問いへの回答が「模倣」なのである。したがって模倣説は、フランス環境学派にとっての鍵概念として展開され、タルドが犯罪学者として世界的に重要性を認められていくのも、その模倣説にもとづく犯罪理論が評価されたためである。とはいえ、ここで注意しておかなければならないのは、タルドは犯罪現象をつうじて「模倣説」を着想したのではないと思われる点である。むしろ逆に、そもそもタルドは最初から「模倣」概念によって社会を説明する思想を着想しており、タルドの犯罪理論はたんなる応用にすぎず、だからこそ犯罪現象以外のさまざまな著作を展開することができた、と考えるべきであろう。この点については議論の余地もあると思われるが、いずれにせよ本論では主要な問題ではないので、これ以上は言及しない。次に、模倣説の思想的内容について検討することにしよう。

4) 模倣説と自然哲学

タルドの主著『模倣の法則』（1890）は、社会現象を「模倣」という概念によって説明する内容になっているが、その理論については、出版当時から多くの誤解にさらされていたようである。その理由のひとつは「模倣」という概念の曖昧さにあると思われるが、もうひとつはタルド独自の哲学的な世界観にあると思われる。そして後者の原因こそ、しだいにタルドの著作が顧みられなくなった最大の理由であろうと筆者は考える。

①発明と模倣

タルドは、「発明」と「模倣」を社会現象の本質と捉え、「模倣が川であるとしたら発明はその源流がある山である」と述べる。そして発明は、同時代のもの（流行）であれ過去のもの（慣習）であれ、さまざまな異質の「模倣の流れ」が結びつくことによって生じ、かならずしも著名な発明にかぎられるのではなく、些細な思いつきや改変も含めて、どのような個人のなかでも生じるものとされる。他方で「模倣」については、社会現象において意図的な模倣が機能する領域はごくわずかで、ほとんどは無意識的な模倣が占めていると論じられる。

さらに、社会的領域における「模倣」は、物質的領域における「波動」、生物的領域における「遺伝」と同じく、「ある差異（特殊性）を反復によって伝達し、広める」という点で「普遍的反復」の一形態であると論じられる。たとえば、海面のある地点に生じた位置エネルギー上の変異

は、その水分子が遠くまで移動しなくても、波という形式で太平洋の向こう側まで伝わる。それと同じように、ある国で生じた発明は、そこにいる人々が移動しなくても、コミュニケーションをつうじた模倣によって空間的には世界中に、時間的には子孫たちに広まる。

タルドの思想は、根本的にはここで述べた「差異と反復」という原理に帰着する。しかし、さらにその原理がもとづく世界観は、当時および現在の社会科学が前提とする世界観とはまったく異質なものである。先に述べておくと、それは近代以前の世界観、つまり自然哲学の伝統をひきずったもののなのである。

②自然哲学の系譜

タルドが述べる主な「模倣の法則」のうち、「模倣は内部（思想）から外部（文化的活動）へと進む」および「模倣は優等者から劣等者へと進む」というものがある。一見すると奇妙に思われるそれらの法則は、いずれも先に述べた「差異と反復」の原理にもとづいている。

まず「模倣は内部から外部へと進む」というのは、ある個人精神の内側に生じた「差異」（それは発明であったり、あるいは外国からの模倣であったりする）は、「反復」をつうじて人々のあいだに広まるだけでなく、しだいに成長して具体的な形態をとるようになる、という意味である。たとえば、初めて西洋のピストルをみて衝撃を受けたある民族が、ピストルの輸入をつうじて、しだいにその背後にある文明のさまざまなシステムを模倣していき、ついにはその民族の文化全体が西洋文明と同一化していく、という過程がそうである。このばあい最初のピストルは、後に西洋文明という花をあらゆるところで咲かせることになるような、最初の種子である。

したがって模倣されるものは、最初の「差異」であり、いいかえれば後の未来に広がることになる活動である。もうひとつの「優等者から劣等者へ」の法則についても同様に理解することができる。タルドが述べる「優等者」というのは、かならずしも経済的・政治的強者のことではなく、未来の「社会資産」をもつ者のことを指している。したがって、「優等者から劣等者へ」というのは、「内部から外部へ」とほぼ同じことを意味していると言ってよい。

このようなタルドの思想が、可能態から現実態への移行として世界を捉えるアリストテレス由来の自然哲学の流れにあることを見て取るのはたやすい（実際、タルドは序文でそのようなことを述べており、また未公開の論文に「可能態」という題を付けている）。このように、すでに近代科学によって根底から否定された「可能態」を社会科学の領域に持ち出したことは、当時の社会学のみならず、現代の社会学においてさえ、タルドが明らかに特異な思想家であることを示している。

③個と全体——アトミズム的世界観とモノド論的世界観

さらにもうひとつ、デュルケムが属し、現代につながる近代社会学の流れとは異質の前提が挙げられる。それは、タルドの「個人」にたいする独特の思想である。個人がさまざまな模倣の流れの結びめであるということは、社会全体として巨大な模倣のネットワークが形成されていることになる。タルドは、それは個々の脳がメディアをつうじて直結されている状況に等しいと考え、社会を「集合化した脳」と捉える独特の観点に行き着く。

「したがって進歩とは一種の集合的思索である。それは固有の脳をもってはいないが、模倣のおかげで、複数の発明家や知識人たちの脳の連帯が可能になる」（Tarde 1890 [= 2007] : 217）。

この観点は、『模倣の法則』とほぼ同時期の著作である『モナドと社会科学』(Tarde 1893)にもっと明確に示されている。その著作でタルドは、個々の脳を「モナド」とみなす独自の社会学を展開している。モナドというのは、外部の全体を内部に組み込んでいるような個のあり方を示すために用いたライプニッツの概念である。

モナドについてわかりやすく説明するために、インターネットを例に挙げる。インターネットに結ばれたサーバーの内部には、インターネットを構成する全サーバーのリストが記録されている(実際にはもっと複雑な仕組みなのだが、説明を単純にするためにこの前提で話を進める)。インターネット上に、あるサーバーが消失したり出現したりすると、その情報はすぐさま隣のサーバーに伝えられて内部のリストに書き込まれ、最終的に全サーバー内のリストが書き換えられる。つまり、インターネット上の変化は、各サーバー内部のリストの変化と連動する。したがって、個の内側(各サーバー内にあるインターネットを構成するサーバー全体のリスト)は全体(インターネット)を反映する鏡である。

この例では、個に生じた変化が全体の変化を引き起こし、その全体の変化が個の変化を引き起こすことになるのだが、その「全体」が意味するのは、大陸合理論論が想定するような「個を超越した全体」ではなく、イギリス経験論が描きだすような「バラバラな個の総和」でもなく、「互いに結ばれたすべての個」である。そのような「すべての個＝世界」を内包した「個」を、ライプニッツは「モナド」と名付けた。

そのような「モナド」としての個人の脳に生じた変化を、先ほどの「差異」あるいは「発明」と言い換えれば、タルドの模倣説の基本的骨格が明らかになる。つまり、個人(脳)が模倣をつうじてネットワークを構成するとき、そこには「個人を超越した全体(社会)」というものは実在せず、実在するのは個人たちだけである。そして、個人の内部で生じた差異(発明)は、模倣をつうじてネットワーク内の他の個人に伝えられ、広がり、具体的な形態をとっていく(企業であれば「製品化される」)。

このようなタルドの思想的前提は、デュルケムの社会学とはまったく異質の前提に立っている。タルドが「全体」が実在しないモナド論的世界観に立っているのにたいして、デュルケムにとっては「全体」こそが実在であり、個々のものをその実在を構成する原子のようなものとして考えるアトミズ的な世界観に立っている。まさしく両者の対立の根底にあるのは、そのような思想的前提の違いである。先ほどのデュルケムの言葉(「一個人以上の何者でもない一個人が、いかにして社会を思うがままに仕立て上げるだけの力をもつことができよう?」)にたいしてタルドが次のように答えるのも、たんに両者のあいだに「全体主義／個人主義」という政治イデオロギー的対立があるからではなく、両者の思想的前提あるいは世界観が根底から異なっているからである。

「たしかに、さまざまな社会的現実は一たび構成されると…(略)…個人を圧倒するということは私も認める。それでも、これら不思議な建造物がどのように構成されたのか、それが個々の人間や人民の勢力によるのでなければ、どのように成立したというのか?」(Tarde 1898 [=2008]: 104-105)

そのような両者の思想的前提の違いに由来する学問的論争は、二人の「社会学」観の対立となっ

て頂点を迎える。

5) 社会学と社会科学——「社会学」の構想をめぐる対立

こうして両者のもっとも緊迫した最後の対立、つまり 1904 年にパリで開かれた社会学のあり方をめぐる討論会「社会学と社会科学」での両者の主張と対立が意味している内容が明らかになる⁴⁾。

その討論会でデュルケムは、タルドが心理学的な立場をとっていると非難し、社会学はいくつかの個別の専門領域に分かれるべきであると主張する。心理学的立場を否定するのは、デュルケムにとって全体（社会）は個（個人精神）に還元されない超越的なものだからである。社会学が個別の専門領域に分かれなければならないのは、デュルケムにとって「社会学」とは、「個々の社会学」から超越した「全体」だからである。付言すれば、他の学問領域と並ぶものとしての「社会学」講座の開設を求めて奔走したデュルケムにとっては、その「社会学」もまた、個々の専門領域としての社会科学から超越した（全体としての）「社会科学」の下位に置かれるべきものであった。

他方でタルドは、さまざまな社会科学の基盤として「間－心理学 inter-psychologie」を説き、それを社会学として据えることを主張し、あらゆる社会諸科学の領域は心理学化する運命にあると述べる。社会学としての「間－心理学」を構想するのは、先に述べたように、タルドにとって、個人精神の外部に超越するものとして社会は実在せず、その社会（全体）は個人精神が模倣という心理的相互作用によって結びついたものだからである。

しかし、ここでタルドが「間－心理学」を社会学として据えることを主張しながら、他方ではあらゆる社会諸科学が「心理学化する」と述べていることは、一見すると矛盾しているように思われ、その意図がつかみにくい。ところが、ここでタルドの思想的前提を思い起こし、タルドが専門領域としての個々の社会科学もひとつのモナドであるとみなしていたと考えれば、その疑問も解消する。つまり、個々の社会科学領域が相互交流によってネットワークを形成するとしたら、「社会科学」は個々の社会科学領域の外部に（超越したものとして）実在するのではなく、それらの内部に実在するものとなるはずである。そして、それら個々の社会科学の内部に「社会科学」として存在するものこそ「間－心理学」であり、社会学はそのようなものとならなければならない、というわけである。

タルドが主張する社会科学と社会学のあり方は、現在の大学制度における学問区分とはまったく異質であり、タテ割りの学問制度に慣れた現在のわれわれがイメージするのは難しいが、おそらくそこで成立する個々の社会科学は、現在の学問区分のような高度に専門化した閉じた学問領域ではありえず、それぞれに共通する思想（これが「間－心理学」であり「社会学」とであるとされる）にもとづいて緩やかに連帯するような学問であろう。

まとめるなら、「社会学と社会科学」のあり方をめぐって、デュルケムが樹形図状の上下関係からなる学問区分と各学問の専門性の確立を主張したのにたいして（というのも樹形図状に学問を細分化していくことは、専門性を高めることに等しいから）、タルドはネットワーク状に結びついた学問区分と各学問相互の連携を主張した。ところで、このような両者の主張の違いは、同時にまた両者の政治的な立場と結びついていないだろうか？ というのも、先ほど述べたように、デュルケムが属していた思潮がブルジョアと結びついた国家主義であり、それが科学と理性と権威を求めるも

のであったとしたら、学問の専門性を高めるデュルケムの志向にもその思潮が反映されていると考えられるからである。

3. 「タルド=デュルケム論争」と現代——学問の専門性と政治

過去の二人の社会学者の論争のうちに学問の専門性をめぐる問題が浮かび上がってきたことにより、ようやくわれわれは現代の論争、つまりタルド再評価をめぐる学問の専門性という観点からの対立について考えることができるように思われる。しかし、前節の最後で触れた過去の二人の学者の思想と政治との関連については、まだ説明が不足していると思われるので、まずデュルケムとタルドの思想が親和性をもつそれぞれの政治的立場を検討し、それらの立場が現代のタルド再評価とどのように結びついているかを考えることにしよう。そのうえで、学問の専門性と政治という現代の社会科学が直面する課題との関連について考察して本論を終えることにしたい。

1) 政治との関連

まず容易にみてとれることは、全体を個から優越（超越）したものとみなし、社会を道徳と同一視するデュルケムの思想は、明らかに全体主義、あるいは国家主義に親和的であったということである。つまり、道徳的な権威としての国家が市民を統治するという考え方である。他方、個を優越する全体を認めないタルドの思想は、国家の必要性を認めないアナキズムにも親和的であるが、同時にコスモポリタニズム（世界市民主義）にも親和的である（実際、『模倣の法則』ではそのような主張がみられる）。中根千枝（中根 1967）の言葉を借りるなら、デュルケムの社会観（と社会学観）が「タテ社会」的であったとしたら、タルドの社会観（と社会学観）は「ヨコ社会」的である。

実際、デュルケムは道徳教育論をなかば専門としていたし、当時は国家主義がますます強化されていった時期であったことを考えるなら、国家主義と親和的なデュルケムが当時のフランス社会学の覇権を握ることになったのは、今となってみれば当然のことであった。しかし、グローバリゼーションと新自由主義的世界体制のもと、国家の機能がますます弱体化し、国境を越えたコミュニケーションが増加した現在の状況には、むしろタルドの世界市民主義的な思想のほうが親和性が高いことは明らかである。とりわけインターネットや携帯電話などの新しいメディアの普及は、家父長的権力の衰退とあいまって、ますますヨコ社会的な人間関係を日常的なものとしているが、これもまたタルドのモノダ論的な思想のほうが好都合である⁹⁾。

こうしたことが、反国家・反新自由主義グローバリゼーションを主張する左派思想家たち、とりわけタルドの影響を受けたドゥルーズの弟子たちがタルド著作集の刊行と再評価を積極的に主張していることの背景となっていることは、彼らの多くがネグリの主張する一種の世界市民主義（「マルチチュード」）に肯定的であり、全体主義的な（福祉）国家主義に批判的であることを考えると、疑う余地がないと思われる。

2) ポスト近代の社会学の可能性——グローバル化する世界と大学のなかで

さらに学問的にも、刊行者たちを中心とするタルドの再評価を主張する者たちのほとんどは、いわゆるアカデミズムの伝統に縛られた専門研究者であるよりも、異分野をまたいで交流し活動する思想家・社会活動家である。それはデュルケムが想定し、現在の大学制度において実現されている

タテ割りの学問区分に従った専門的社会科学者ではなく、タルドが主張したような非専門的（領域横断的）社会科学者のほうが近い。

他方、学説史家ミュキエリ（およびその支持者）による、タルド著作集の刊行者たち（哲学者や人類学者、いかえれば学説史を専門としない者たち）のタルド再評価の動きへ向けられた攻撃は、ある面ではそのような非専門的研究の広まりにたいして学説史の専門性を防衛する動きとして捉えることもできる。しかし、ここで刊行者たちがネグリやフーコーのシンパサイザーであり、彼らの反グローバリゼーション運動の支持層が都市の非正規雇用者や第三世界の貧困層に同情的であることを考えると、ミュキエリと彼らの対立の構図は、クラークが述べた19世紀末におけるソルボンヌ／コレージュ・ド・フランスの対比を思い浮かばせるものとなる。つまり、その対比がブルジョア・国家主義・科学／プロレタリアート・反国家主義・創造性の対立を意味し、そして人文・社会科学の科学たるゆえんが専門性と実証性に求められるとしたら、現在の論争の背景は、19世紀末に起こった論争の背景とほぼ重なってくる。そこから、現在の再評価をめぐる対立は、たんなる学問的領域の専門性をめぐる争いというだけでなく、その背景として政治的な潮流の対立が存在していることを予想させる。

さらに合衆国の物理学者アラン・ソーカルが、自然科学の用語の使用法にかんして現代フランス哲学の思想家たちや社会学者、フェミニストたちを批判する著作を著し、タルド著作集の刊行協力者である科学哲学者ブルーノ・ラトゥールと論争したこともまた記憶に新しい（Sokal & Bricmont 1999）⁶⁾。それもまた、自然科学領域の専門性を防衛する動きと捉えることもできるが、先ほど述べたのと同じような政治的潮流のなかで生じた出来事と考えることもできる。

その政治潮流が具体的にどのようなものであるか、ここで明確に述べるだけの余裕はないが、手短に言えば、それはおそらく19世紀末の状況とは連続はしているが、さまざまな問題がグローバリゼーションのなかで変質し、拡大したものであろう。かつての「ブルジョア・国家主義・科学／プロレタリアート・反国家主義・創造性」との対比を素直に拡大すると、それは「ブルジョア・世界国家主義・科学／プレカリアート（不安定生活者）・反世界国家主義（アナキズム）・創造性」という図式につながるように思われる⁷⁾。

そのような対比が実際に妥当なものであるかどうかについては稿を改めるとして、筆者の考えによれば、社会科学においても社会学においても、専門領域を防衛する動きは、さらなる細分化を進める動きとともに、しだいに強くなっているように思われる。それは、研究資金にかんする競争原理の導入や効率的予算配分などが進められるなかで、より専門性を高めることで学問領域の権威を高めようとすることに由来するのかもしれない。他方、専門領域が細分化するにつれて、ますます専門領域を超えた複合的な研究主題が登場しており、そのことが異分野の専門領域との接触の必要性をますます高めており、その結果として専門領域どうしの縄張り争いのような、非生産的な動きも起こりやすくなっている。

日本国内においても、大学改革の流れのなかで複合領域の研究分野が増え、異分野との緊密なネットワークを構築することによって新たな研究集団が出現しやすくなっている。そうした新しい動きが既存の専門領域と衝突しやすい状況にあると考えても、それほど間違っていないのではないだろうか。いずれにしても、19世紀末に起こったタルドとデュルケムの対立、今世紀におけるタルド再評価を進める哲学者たちと社会学説史家の対立は、日本におけるそのような状況とも無縁で

はないと思われる。いずれにしても過度に細分化した社会科学と社会学が、不毛な「諸学問の争い」に向かうことを避け、より実りある研究協力のあり方を考えるために、ここで紹介した過去の対立をめぐる検証は、多少なりとも参考にならないだろうか。すくなくともポスト近代社会の社会学は、デュルケムが構想した縦割りに細分化された社会学とは異なる、むしろタルドが構想したヨコに連携する社会学を目指すことが必要であることは明らかで、そのためにタルドの議論は何らかの寄与をすることができるのではないだろうか。

本稿は国際社会文化研究所研究プロジェクトの研究成果の一部である。関係者に謹んで感謝の意を表したい。

註

- 1) 以下、引用頁は邦訳のある文献については邦訳書の該当頁で記す。
- 2) 少々長くなるがクラークが指摘する箇所 (Clark 1969: 8-10) の抜粋を載せておく (翻訳と省略は村澤による)。

…第一の文化的潮流は——デュルケムの議論に代表される——は、デカルト主義 cartesian であった。デカルトの影響下でつくられたその伝統は、理性、秩序、権威を重視することに特徴があり、その「幾何学的精神」を体现する官僚制度 (教会、政府組織、軍隊、国立大学制度) のなかに浸透していた。革命とナポレオン時代を経て、この思潮はブルジョアたちによってなかば公的なイデオロギーとして力を増していった。その当時、基本的な方向性はすでに多くの確立の官僚組織のうちに広まっていたが、1870年の第三共和政にいたって、このデカルト主義的思潮の支配がほぼ確実となった。

このデカルト主義に対抗する文化的潮流が、自発主義 spontaneity である。それは芸術的創造性やロマン主義的な主観主義、そして「繊細の精神」に導かれた個人の発明を重視する思潮であった。一九世紀終わりになってブルジョアとデカルト主義の結びつきがますます公的制度において明確になると、それに反対するこの思潮 (ときに革命的な、反ブルジョア主義、反主知主義、反集団主義) もまた強まっていく。審美的、政治的、経済的な攻撃が、反ブルジョア主義的イデオロギーのうちに混じり合っていた。それを支持していたのはかつての貴族たちの末裔、田舎の農民、都市のプロレタリアートたちであった。…反ブルジョアの思潮が十分に高まり、社会的紐帯が十分に弱まると、人々にとって自発主義右派と左派のあいだを移動することはさほど難しいことではなかった。もっと典型的な例は、暴力理論で知られるジョルジュ・ソレルである。彼は、無政府主義の組合主義者の知的リーダーから、アクション・フランセーズの指導者にとっても、そしてときにはファシストにとっても参考とされるようになった。

一九世紀初頭、こうしたデカルト主義の中心となったもっとも重要な知的拠点が、エコール・ポリテクニクであった。軍事的かつ工学技術的な問題に対処するために最高の科学的知識をもった人材を養成すべく、ナポレオン時代につくられたこの学校は、それほど躊躇することなく、社会問題にも同じ方法を適用しようとするようになる。この学校はサン・シモンとオーギュスト・コントの思想に影響を受け、学生たちは「学校であたかも橋や道路の作り方を学ぶかのように、ある宗教をつくろうとしていた」。この学校の卒業生からはサン・シモンやコントの弟子たちが生まれ、この学校の精神を、国内の官僚組織からブルジョアに支配された社会領域にいたるまで、広げ回ることになる。

一九世紀の初期において、エコール・ポリテクニクにしばしば対立したのはソルボンヌであり、たいていのばあいソルボンヌは自発主義を装っていた。その代表的なスポークスマンはヴィクトル・クーザンであり、その独特のレトリックを多用したスタイルと「柔軟」な個人主義的哲学は、第二帝政期をつうじてソルボンヌの組織に深く刻み込まれた。

しかし第二帝政が崩壊し、その崩壊がだらしのない生き方と非体系的な思考法の敗北とみなされるようになると、デカルト主義者たちは、古い教育システムを「新しい大学」につくりかえようとした。彼らにとって、クーザンの軽薄な哲学は不要であった。改革者たちは、自分たちの理想を、オーギュスト・コントの実証主義、イボクリット・テーヌやアーネスト・ルナンの科学主義、クロード・ベルナールの厳密さに求めた。そして彼らは、ドイツの大学、つまりプロテスタント系の、各学問分野に分かれた、研究志向型の大学をまねて、新しい制度をつくろうとした。1880年から1890年にかけて、彼らは影響

力のある地位をとりつづけたが、そのとき、若きエミール・デュルケムが彼らの関心を惹いた。社会を研究するに当たり、デカルト主義的なメンタリティと方法論をもっとも押し広げる人物を、彼らはデュルケムのうちに見いだしたと感じたのである。デュルケムの著作は、第三共和制の政府の要求に、完全にぴったりと一致した。反教会主義者たちにたいして、デュルケムはかつてのカトリックの教義に代わる世俗の道徳のための基礎を与えた。過激派や「連帯」を主張する過激な政治家たちにたいして、デュルケムは彼らの政治哲学により体系的な基礎を与えた。ドレフュス派にたいして、デュルケムは一貫して知的指導を与えた。二〇世紀になると、ソルボンヌや国立大学会議において、当時の教育省の大臣と緊密な関係を結んでいたデュルケムは、フランスでもっとも影響力のある大学人政治家となったのである…。

このようなソルボンヌの動きは、多くの官僚の支持を受け、すぐに当時の新聞や教育組織に広まることになったのだが、それにたいして自発主義の残党たちは、ソルボンヌのうちにもはや安心して身を置くことができる制度的隙間を失っていった。当時の制度のうちでは、法科大学、そしてある程度まではコレージュ・ド・フランスが彼らにとってもっとも快適な場所であっただろう。

タルドは、ジェズイット会のデカルト主義的傾向に拒絶反応を起こして以来、トゥールーズとパリの法学部の自発主義の伝統にますます影響を受けていった。それらの法学部は、国立大学のシステムの一部ではあったが、その学生たちはソルボンヌに多くいた過激派ではなく、自発主義のイデオロギーを賞賛する制度的文化を維持しようとする優秀な若者たちであった。後に、タルドがコレージュ・ド・フランスに就任したとき、彼はそこにいるのがそうした人々であることをすぐに理解することができた。そのような哲学者には、たとえばポール・ジャネ（デュルケムにたいして、オーギュスト・コントを賞賛する彼の論文から一章をまるごと削除させることになった人物）やジャン・イズレ（当時広く引用された「フランスの200の普通学校でデュルケム氏の社会学を教えなければならないという義務は、わが国が知るかぎりにおいて、もっとも重大な国家的損失である」という文章を書いた人物）がいる。さらに、コレージュにおけるタルドの後継者であるベルクソンがいる…。『新しいソルボンヌの精神：古典文化とフランス文化の危機』と控えめに題されたアガトンの本に書かれた短い一説は、当時の情勢をよく示している。「…デュルケムの事例は、新しい精神の勝利を示す事例である。虚飾に満たされた大学で、デュルケムはソルボンヌの統治者、万能の支配者となった。このことは哲学部門の教授たちがよく知っていることだ。この教授たちは、市民たちの憤み深い下僕としての役割を減らされ、デュルケムのあらゆる命令に従い、彼の指示のもと抑圧されている…（略）…デュルケム氏は、確実に、彼の知的支配のための体制を築いた…」。

3) デュルケムの反心理学的主張の理論的根拠としては Durkheim (1924) を参照。

4) この討論会の記録については村澤 (2007) を参照のこと。

5) グローバル化した人類学における同様の問題設定による詳細な議論についてはチャングリン・クワの議論 (Kwa 2002) を参照。その論文でクワは、タルドの名前を明示していないが、明らかにタルドとデュルケムの論争を前提にした興味深い考察を展開している。

6) 両者の論争については『現代思想』(1988年11月号)に詳しい。

7) この問題については本論では詳しく述べないが、やや詳細な議論として村澤 (2011) を参照。

文献

- Besnard, Philippe 1995, «Durkheim critique de Tarde : des Règles au Suiside» in Massimo Borlandi & Laurent Mucchielli [éd.], *La sociologie et sa méthode : Les Règles de Durkheim un siècle après*, Harmattan, pp.221-243.
- Blondel, Charles 1928, *Introduction à la psychologie collective*, Armand Colin. (=清水幾太郎他訳, シャルル・ブロンデル『社会心理学入門』, 1958年, 日本評論社)
- Clark, Thierry N 1969, *Gabriel Tarde : On communion and social influence*, The University of Chicago Press.
- Durkheim, Émile 1895 [1960], *Les règles de la méthode sociologique*, PUF. (=宮島喬訳, エミール・デュルケム『社会学的方法の規準』, 1978年, 岩波書店)
- Durkheim, Émile 1897 [1967], *Le Suicide : Étude sociologique*, PUF. (=宮島喬訳, エミール・デュルケム『自殺論』, 1985年, 中央公論社)
- Durkheim, Émile 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse : Le système totémique en Australie*, PUF. (=古野清人訳, エミール・デュルケム『宗教生活の原初形態(上・下)』, 1942年, 岩波書店)
- Durkheim, Émile 1924, *Sociologie et Philosophie*, Félix Alcan. (=佐々木交賢訳, エミール・デュルケム『社会

学と哲学』, 1985 年, 恒星社厚生閣)

- Kwa, Chunglin 2002, 'Romantic and Baroque Conceptions of Complex Wholes in the Sciences', in John Law & Anemarie Mol (eds.), *Complexities: Social Studies of Knowledge Practices*, Duke University Press, pp.23-52.
- Latour, Bruno 2002, 'Gabriel Tarde and the End of the Social', in Patrick Joyce (ed.), *The Social in Question: New Bearings in history and the social sciences*, Routledge, pp.117-132. (= 村澤真保呂訳, ブルーノ・ラトゥール「(社会的なものの)終焉: アクターネットワーク理論とガブリエル・タルド」, VOL COLLECTIVE 編『VOL 05 エピステモロジー: 知の未来のために』所収, 2011 年, 以文社, pp.248-249.)
- Lazzarato, Maurizio 2002, *Puissance de l'invention: La psychologie économique de Gabriel Tarde contre l'économie politique*, Les empêcheurs de penser en rond.
- Letonturier, Eric 2000, «Gabriel Tarde: la communication et des reseaux», *Cahiers Internationaux de Sociologie*, vol.108, pp.79-102.
- Millet, Jean 1970, *Gabriel Tarde et la philosophie de l'histoire*, Vrin.
- Mucchielli, Laurent 2000, «Tardemania?: Réflexion sur les usages contemporains de Tarde», in Massimo Borlandi, Laurent Mucchielli, Claude Blanckaert et Emmanuelle Sibaud, *Gabriel Tarde et la criminologie au tournant du siècle*, Presses Universitaires du Septentrion, pp.161-184.
- Renneville, de Marc 2004, «Préface: Le printemps des sciences du crime», in Gabriel Tarde, *La criminalité comparée*, Les empêcheurs de penser en rond / Le Seuil, pp.7-23.
- Sokal, Alan & Bricmont, Jean 1999, *Fashionable Nonsense: Postmodern Intellectuals' Abuse of Science*, Picador. (= 田崎晴明ほか訳, アラン・ソーカルほか著『「知」の欺瞞-ポストモダン思想における科学の濫用』, 2000 年, 岩波書店)
- Tarde, Gabriel 1890, *Les Lois de l'imitation: Étude sociologique*, Paris: Félix Alcan. (= 池田祥英・村澤真保呂訳, ガブリエル・タルド『模倣の法則』, 河出書房新社, 2007)
- Tarde, Gabriel 1895, «Monadologie et sociologie» in *Essais et Melanges Sociologiques*, Storck et Masson (= 村澤真保呂・信友建志訳, ガブリエル・タルド『社会法則/モナド論と社会学』, 2008 年, 河出書房新社, pp.123-234.)
- Tarde, Gabriel 1898, *Les lois sociales*, Félix Alcan. (= 村澤真保呂・信友建志訳, ガブリエル・タルド『社会法則/モナド論と社会学』, 2008 年, 河出書房新社, pp.7-122.)
- 稲葉三千男 1963, 「ガブリエル・タルド-その著「世論と群集」を中心にして-」『東京大学新聞研究所紀要』11 巻, pp.1-13.
- 大野道邦 1987, 「〈構造化されたもの〉と〈構造化するもの〉-デュルケムとタルドの論争」『社会学の焦点を求めて』, アカデミア出版会, pp.284-305.
- 中根千枝 1967, 『タテ社会の人間関係: 単一社会の理論』, 講談社.
- 村澤真保呂 2007, 「(翻訳) 国際社会学雑誌 12 号: 社会学と社会科学-タルドとの対決」『龍谷大学社会学部紀要』(31), pp.71-76.
- 村澤真保呂 2011, 「エピステモロジーと社会学-ラトゥールとタルドのあいだ」『VOL 05 エピステモロジー: 知の未来のために』VOL COLLECTIVE 編, 以文社, pp.250-253.